



## 光を織る — 色を織る —

色は、闇の世界に太陽の光が射しこんで初めて姿を現します。

色を刷るのが印刷ならば、印刷は光を織りこむ表現と言えるかもしれません。

色を生みだした光と、色によって生みだされる光。

光の美しさを、さまざまな色表現で紙いっぱいに織りなしてみたいと思います。

高橋 正実 | MASAMI TAKAHASHI

## ABOUT TRIAL

トライアルについて

### ●コンセプトとその背景

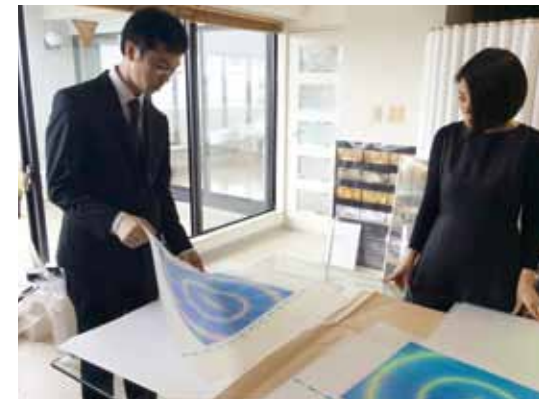
光は、誰もが美しいと思えるものひとつだと思います。植物は光があって初めて育ち、私たち人間も太陽の光を浴びることで生命体としてのリズムを得ます。光が消えると眠ってしまいますし、明かりを見ればウキウキとします。私たちはいろいろな意味で光に生かされ、光に助けられています。

「織」がテーマだと伺ったとき、印刷で何かを織ってみたいと思いました。網点で画像を表現する印刷物は、言わば色を織り重ねる技術ととらえることもできます。そして色は光の屈折が絡み合って生じます。こうして「色」「印刷」「光」という三者の関係に思いを巡らすうちに、浮かび上がってきたのが、色を織りなす印刷で「光を織る」というコンセプトでした。

### ●トライアルの手法

ではどうやって光を織っていくのか。例えばスーラという画家は、点描によって光を描いていました。「色は光でできている」という科学的視点があったかどうかは別にしても、少なくともスーラは美しいものを追い求めた結果として、科学的にも整合する表現に行き着いていたのです。

例えば「機能美」という言葉が表すように、科学的な分析や理論から追求することと美しさは、不思議とどこかで交わってくるようです。私たちデザイナーは往々に



して瞬間的に「これが美しい」ととらえていきますが、それは到底、科学的に説明できるものではないはずです。なのに、美しさはなぜか不思議と科学の理論に適合することが多いような気がするのです。

それをこの機会に立体的なコラボレーションによって確かめてみようと思い立ちました。私はイメージという方向から、プリンティングディレクターの仲山さんは技術の方面からそれぞれ光の世界を追いかけるという方法でつくりあげていきます。そうすればきっと科学と感性がどこかで出会い、その交点で色と光の世界の「見える化」ができる。そのような考えのもとで、美しい光の世界を織りなすことを目標にトライアルさせていただきました。

### ●印刷について

印刷を複製技術という行為としての視点を超えて、哲学や精神的な視点から眺めてみると、そこに用途以上の価値と面白さがあることに気づきます。グラフィックトライアルでは最終作品だけでなく、作品の制作プロセスをさまざまな段階でご覧いただけるので、印刷表現の豊かさを実感するためにもとても良い機会だと思います。私自身もこのトライアルを通して印刷表現の未来を考える機会を得ました。この作品を通して光の神秘性と共に、印刷の面白さや不思議さを改めて感じていただければ嬉しいです。



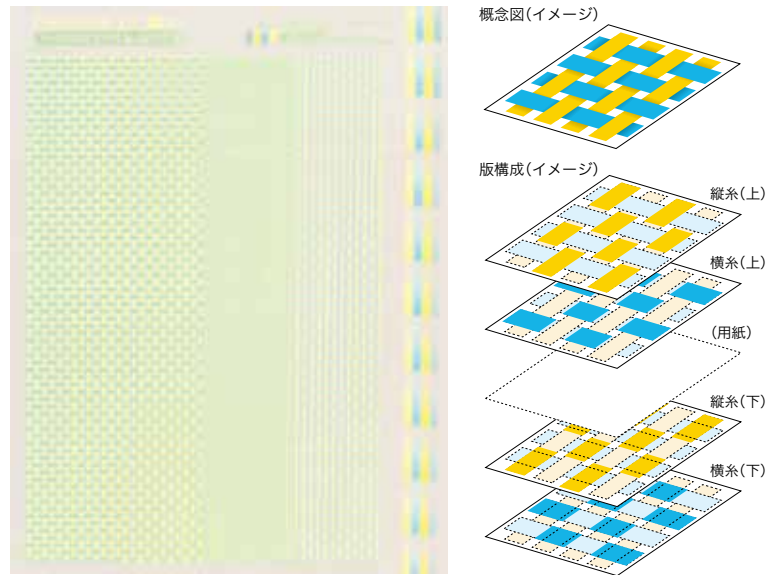
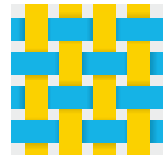
## 色で光を織る

「色を糸に見立てて織ってみます。織物には代表的なものに平織りや綾織り、縹子織りの3つの織り方があるそうです。そこから着想したのが、色を糸のように縦横に織り重ね、立体的な光の層をつくるというアイデアです。生地が織り方でさまざまな色みや風合いを生みだすように、見る角度で違う表情を見せたり、空気の間を感じさせたりするような印刷表現を探します」

### 色を糸になぞらえて インキと紙で光を織る

印刷による平織りの構造の実現を試みた。しかし、版は織物のように交差させることは不可能だ。そこで縦糸と横糸を、それぞれ上に重なる部分と下に潜る部分に分けて4版のデータを作成。これを発光したような印象になるように蛍光イエローと蛍光グリーンで刷ることにした。用紙は半透明のNTパイルを採用。表裏印刷で物理的な立体感をつくり、さらにインキにオパークホワイトを混ぜることで微妙に隠蔽して糸の上下感を出した。

#### 平織り



用紙：NTパイル（パールホワイト）



実験① 白い紙に刷る  
不透明とされる蛍光インキだが、刷ってみると予想外に下の柄を透過して単なるチェック柄に見えてしまった。



実験② 透ける紙（用紙：NTパイル）に刷る  
表裏印刷で織りの構造を再現。インキの調整で上下感を強調したが、目指した質感にはならなかった。



実験③ 糸ごとにグラデーションを入れる  
1本1本にグラデーションをかけた糸で平織りの版を制作。ふんわりとした表情は出たが、上下感が失われた。



実験④ 糸の重なりをグラデーションで表現する  
交差する下側の糸にグラデーションをかけ、糸の流れに抑揚をつけた。見事な立体感が現れた。

## 光で色を織る

「ふんわりと包みこむような光を、やわらかなグラデーションでつくってみることにしました。さまざまな色が混ざりあった淡くやさしい光の色を、グラデーションでさらに繊細にやわらかく織り重ねれば、光を色に置き換えることができるかもしれません。ネオンやLEDのように強い人工的な光ではなく、自然な光そのものをかたちにしてみようと思います」

### グラデーションを重ね 光らしい表情をつくる

「光」の抽象的なイメージに近づけるために、グラデーションで光を連想させるスペクトルを複数作成して刷り重ねた。蛍光インキにパールメジウムや銀を混ぜて輝きを加えたCMYのインキで、光らしい表現も探る。用紙は印刷適性の高いサテン金藤を使用。



用紙：サテン金藤

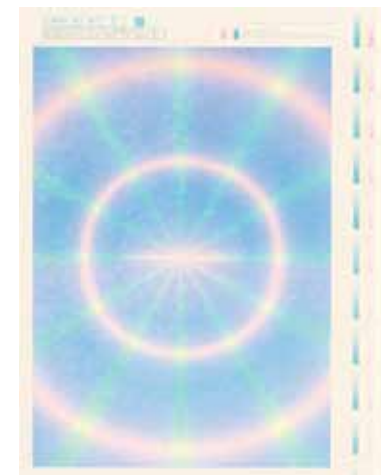
ディテール：同心円状と放射状のパターンを刷り重ねたもの。淡い色でグラデーションを重ねたところ、かなり光の印象を感じる表現になった。しかしデジタルでつくったグラデーションはボケ感が均一すぎて、整然とした表現になり、どうしても違和感が残る。

### 空の写真を用いて 自然界の光を写し取る

自然光のようなやさしい階調をそのまま紙の上で再現するために、グラデーションに使用する素材を空に求めた。それは空が、繊細で複雑なトーンが織りこまれた、空気の間が作りだす光のグラデーションそのものだからだ。空を撮った写真を同心円状と放射状に変形させ、さまざまな質感を持つ用紙に、淡いインキで刷り重ねた。



使用した写真は、グラフィックトライアル2009の参加クリエイター、八木克人氏（凸版印刷）によるもの。



いずれの用紙も、自然で微妙なムラが出現した。  
きらびき S：和紙を染めたような有機的なムラ  
Mr.A-F：透明感のある上品で繊細なムラ  
エスプリCバルキーW：インキの質感が生きたムラ  
人工的なグラデーションではおそらく実現できないような繊細で複雑な階調だ。ただし、重ねるために用いた同心円状と放射状のパターンが予想以上にはっきりと見えてしまった。ここから改良を重ね、幾何学的な形状を感じさせないほどにやわらかな階調を目指す。



用紙：きらびき S



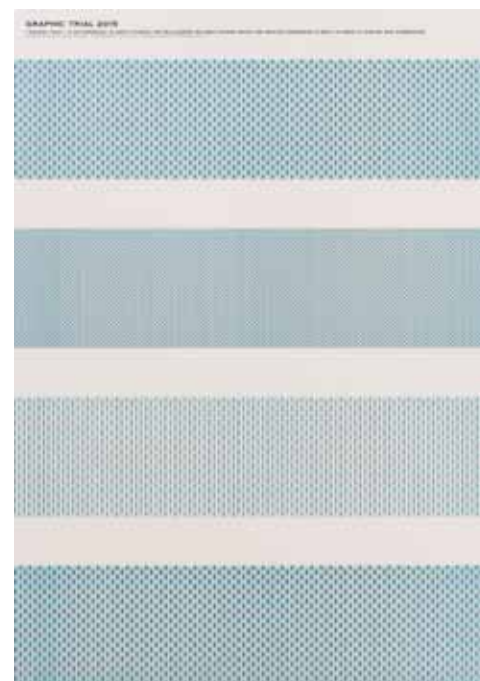
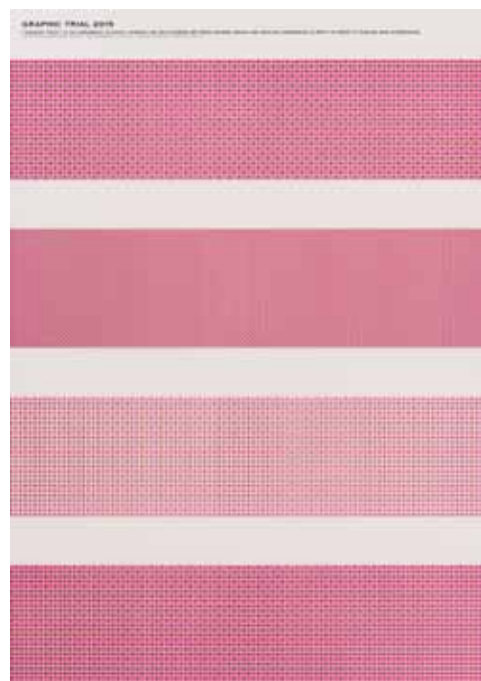
用紙：Mr.A-F



用紙：エスプリCバルキーW

# FINISH

全作品



## POINT & COMMENTARY

ポイントと解説



用紙：New特レーブル輝き(ゴールド)／四六判 135kg

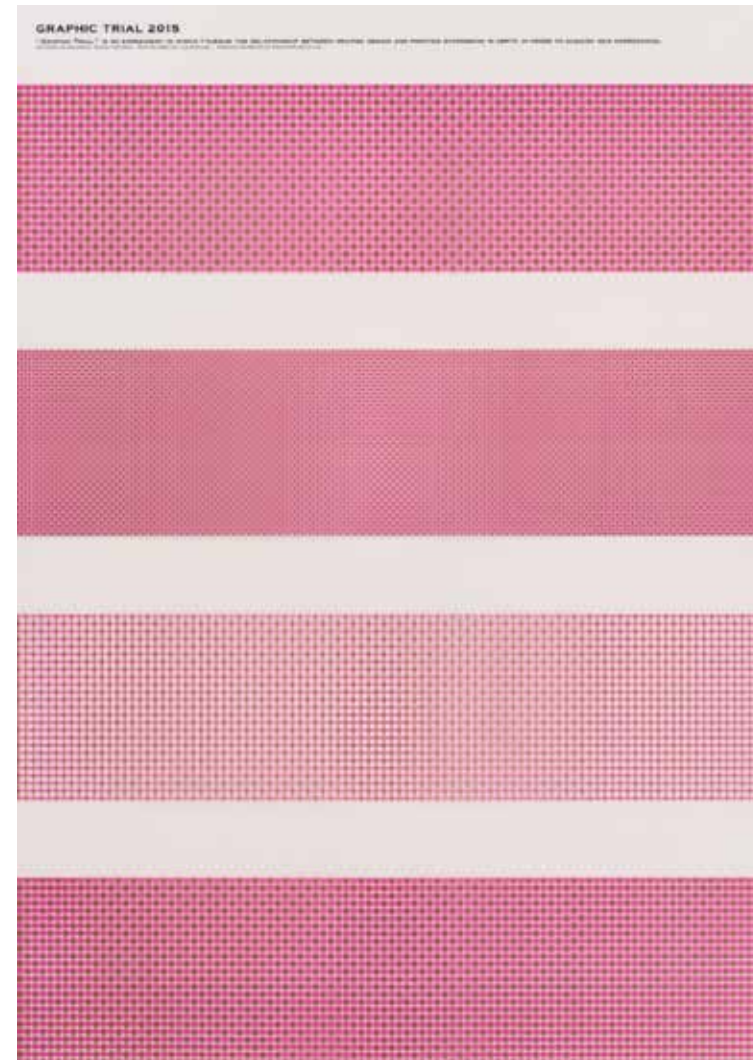
### 版構成



### POINT

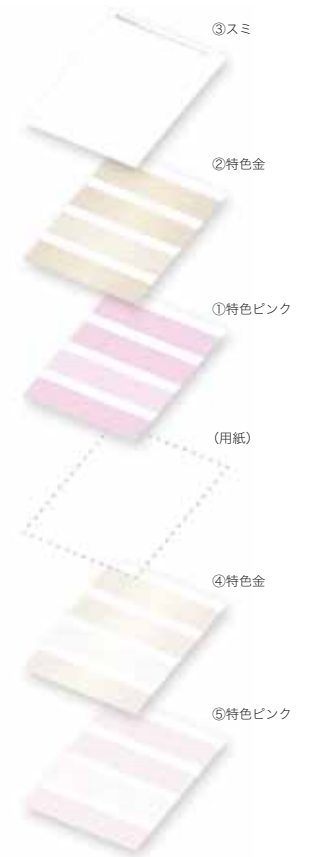


「汎用性の高いプロセスインキは非常に濃度が高いため、高橋さんの求める繊細なグラデーションの表現には向きません。そこで今回の作品ではグラデーションに適するようにインキをブレンドして使用しました。当初は不透明なオパークホワイトと透明なメジウムを使い分け、透過度の異なるインキで前後感をつくる試みに挑戦しましたが、最終的には用紙の個性を生かすためにすべてメジウムでブレンドしています」(仲山)



用紙：NTパイル(パールホワイト)／四六判 230kg

### 版構成



### POINT

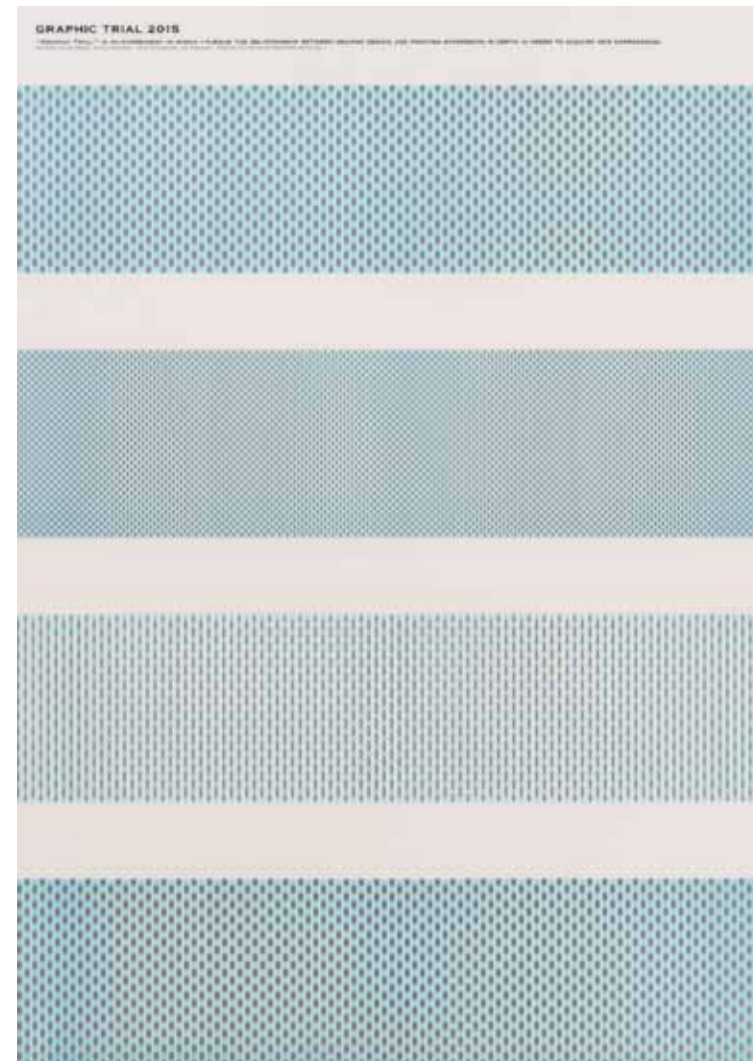


「テーマの“織る”そのままに色を織りました。表裏印刷で、光が色を織りなしていることを端的に表現しています」(高橋)  
 「用紙は透過性の高いNTパイル。厚手の用紙の両面から印刷し、紙厚で陰影を生じさせることで立体的な前後感を出しました。ただし明度の低いインキは陰影が強すぎて前後の見え方に混乱が生じたため、裏側のインキ濃度を下げることで見え方のバランスを調整しました」(仲山)



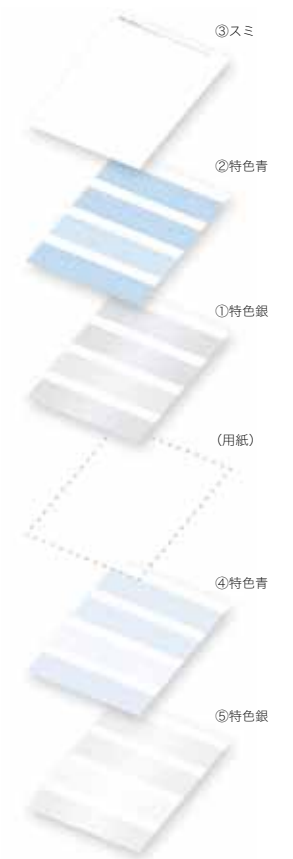
用紙：テラー(白)／四六判 103kg

### 版構成



用紙：NTパール(パールホワイト)／四六判 230kg

### 版構成



### POINT



「他の4点は寒色系と暖色系の光を表現していますが、この作品ではどちらの色も混ざりあい、繊細なバランスが生まれました」(高橋)  
 「非常に繊細な調子と色合いなので、用紙はそれを美しく再現でき、用紙自体にも視覚的な美しさがあるものを前提とし、ケミカルな風合いのものや色の強いものは避けました。その中から最終的に高橋さんが選択したのは、白くて輝きがありながら和の風合いを感じる用紙でした」(仲山)

### POINT

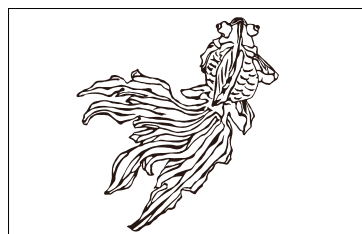


「反射という光の作用を起こす金や銀は直接光を表現しやすい素材なだけに、使い方によっては安直な選択になってしまう恐れもありました。そこで銀には青紫のインキを混ぜ、金は赤金、青金、銀のインキをブレンドし、あくまで色としてのコントロールを行いました。その結果、横糸の色と微妙に同期する色層を持ちながらもメタル色特有の光沢感が生きた、ひと味違った“光”の糸をつくることができました」(仲山)



用紙：New特レーブル輝き(ゴールド)／四六判 135kg

POINT



「画面を漂う金魚は、暖色系の作品では金、寒色系では銀の光沢を帯びています。光の世界を浮遊しながら観る人を誘う存在です」(高橋)  
 「金魚は繊細な色彩が作りだした世界を壊さないことが大前提。画面で目立ち過ぎず、さりげなく存在感を示せるように、同程度の明度の金銀で印刷しました。ちなみにこの金魚は高橋さんが学生時代に描いたものだそうで、これまでも作品に時折登場しているそうです」(仲山)

版構成



AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

今回は「光を織る」というイメージが頭の中にあったとはいえ、どうやってつくったらいいかわからないところから始まりました。その中で、私は考え方の軸やイメージを固めていき、仲山さんはそれを具体化する手立てを印刷の側から考えていくという方法で進行することになりました。その結果、普段は自分で行うような作業もかなり担っていただきながらのトライアルになりました。これは私にとって初めて体験するものづくりのかたちでした。

「皆でつくるデザイン」というのは実際にやろうとするととても難しいものです。しかも今回は明確なかたちもなく、私の頭の中にあるイメージと考え方の軸や方向性だけから作りあげていきました。こういうことができたのも、皆と一緒につくっていくという空気と土壤があるグラフィックトライアルならではのと思っています。コラボレーションにもいろいろな形がありますが、しっかりとイメージを共有し、同じ方向を向いて歩んで行くことさえできれば、このように難しいものをつくりあげることも可能なのだと知りました。

仕上がった作品も、印刷でこんな表現ができるのかと思えるほどに美しい世界になりました。インキが乗ることで紙そのものよりも透過性が感じられることも、色の層の間から下の色が見えて奥行きを感じることも、まさに「光を織る」という今回のコンセプトを体現できた結果だと思います。このままでもとても美しいものですし、ここからさらに色を重ねたり、変えたりすればまた違った見え方へと展開していけるような気がします。

素材としてもとても面白いものですし、印刷表現の可能性を見せるものとしても素晴らしい仕上がりにと思います。今後、私自身もこの手法を素材として何かに活かしてみたいと考えています。きっとご覧になった皆さんにも「これを使えばこんなことができる」「こういう使い方をしてみたい」というイメージを膨らませていただけるのではないかと思います。いかがでしょうか。

—— 高橋 正実

●プリンティングディレクターから

とにかく全部受け止めることから始めようと、印刷も徹底的にコンセプトに沿うことに決めて取り組みました。「ちくちく」という擬音で表される織物は、糸を1本1本丁寧に織ることで完成します。ならば印刷も織るように仕上げてみよう、合理化された製版方法を一切省くつもりで1版1%にこだわって設計しました。

例えばグラデーションは空の写真を4色分解したCMYをベースに制作していますが、機械的に一括補正をかけた単なる分版ではありません。CMY版を1版ずつ個別に合成や補正をかけて調整し、その版をベースにCMY系の薄い色で刷り重ねて作りあげています。かなりややこしい方法ですが、コンセプトに正直に1版ずつ手作りでつくった結果です。一見、わかり難いかもしれませんが、おかげでデータでつくったグラデーションとはまるで調子の違うものに仕上げることができました。

振り返ってみると、高橋さんとは、設問に対して答えを出すというよりは、お互いの目標がどれだけずれていないかを確認するために校正を繰り返していたように思います。大きな方向性から繊細なニュアンスまでたくさんの言葉で語り合い、コンセプトに誠実に向き合うことで実現できた作品です。できればご覧いただく皆さまには、この作品がたどった実直なプロセスを展示でご覧いただければと思います。

—— 仲山 遵

